

演題：『書写・書道教育の現状とこれから』

山梨大学大学院 宮澤正明

I 国語科書写で学ぶこと

書写で何を学ぶのか・書写の学習を通して何が育つのか

① 文字の基礎的知識・・・文字とは何か、漢字・仮名の由来、

書写は、文字を書く技能の習得を中心とするが、これまで文字に関する知的理解を軽んじすぎたのではない。従前の国語科言語事項に「文字」に関する内容があり、そちらに任せすぎてきたのではないのか。漢字の字源、仮名の由来は子どもたちの関心事である。漢字の筆順、構造などは字源から説明できるものがあり、仮名の由来も筆使いや字形と大きく関わるのである。書写の学習を通して、文字が果たす役割、文化としての意義を見つめ理解することは、書写の意義にも通じることである。

② 文・文章・形式の書き方の知識・・・思考力・判断力の育成

書写の学習は、一文字一文字の書き方の習得で終わっては意味が無い。書写の学習の目的は、文・文章、さまざまな書式・形式の中で生きて働かなくてはならない。特に、さまざまな書式・形式(手紙・はがき・掲示物など)には、それぞれに書き方のルールがあり、さらに、これらを誰に宛てるのか(対象者)によって、可読性(用いる字体・書体・文字の大きさなど)、文体、文の内容、用具・用材などを吟味・検討する必要がある。これらの総和によって適切な文書となる。書写力が生きて働くためには、文字の書き方や書式・形式のルールに関する知識に加えて思考力や判断力も欠かせない能力なのである。したがって、書写の学習では、文字を書く活動(言語活動)を通して養われる思考力や判断力も視野に入れた授業を考えたい。

③ 書写技能の基礎・基本・・・思考力・判断力・表現力・書字(写)体力の育成

詳細は、< III 書写の基礎・基本をどのように学ぶのか >

④ 書写の知識・技能の日常化・・・思考力・判断力・表現力・書字(写)体力の育成

②③④は書写の学習内容として欠かせないもので、書写力を育むための柱と言える。しかし、書写の学習には書写力以外にも育まれる力がある。②でも取り上げたが、それは思考力、判断力、表現力など、人が社会生活を営む上で欠かせない能力である。知識・技能などの「学力」はこれらの力によって支えられているとも言える。今日の学力観の在り方として、教科の学習指導内容とともにこれらの能力を含んで「確かな学力」としようとしている。書写の学習指導では、これまで技術偏重であった「確かな学力」をあまり意識して扱ってこなかったように思う。これからは思考力、判断力、表現力などを見据えた書写の学習指導を考えていく必要がある。

<書字(写)体力とは>

文字を書くためには、文字を書く姿勢を支える筋力や、筆記具を微妙に制御しながら動かす手や指の巧緻性や筋力が必要となる。これら一連の行為を長時間持続できる筋力・体力を「書字(写)体力」と名付けた。「書字(写)体力」の基礎は小学校低・中学年で生まれ、文字を<丁寧に、正しく、整えて>書く量に比例すると思われる。教科を問わず、学校が一丸となって取り組む問題と考える。

⑤ 文字・文章を書くそして表現する喜び・・・国語を享受し尊重する心の育成

国際化社会となって、外国語の習得をめざす動きがある一方で、国語尊重の動きが大きくなってきていることも見逃せない。今後、国語科の果たす役割は大きくなることが予想される。その中で、書写の学習は、国語を書き表すための基盤であり、欠かすことのできないものである。さらに、これらの基礎・基本を養う毛筆書写の学習は、自己の課題が発見しやすく、学習の効果や成果が容易に判断できるので、学習者にとって文字を書く喜びを得やすい。また、日本の伝統文化の一つである書道に直結するものであり、結果として日本の伝統文化を理解し、享受することにもつながると考える。

II 新学習指導要領の改訂点

<キーワード> [言語事項]→[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]

① 「静(字形)」から「動(筆使い)」への変換

これまでの字形(完成形)中心の学習指導内容から、毛筆による筆使いを具体的に示して書字過程を重視した学習指導内容へと変換している<例>筆圧などに注意して(中学年)、穂先の動きと点画のつながりを意識して書く(高学年)など。書字過程重視になったことによって、これまでの指導方法を大きく変える必要がある。書かれた結果の作品の良否ではなく、書く学習過程での適否を中心とした学習指導が求められる。指導方法では、文字の完成形を提示するだけでなく、書く過程を演示(示範)することが不可欠になる。評価においても、まとめ書き(いわゆる清書)だけではなく、筆使いや字形を整える過程も加えていく必要がある。

② 書く態度から知識・理解への誘い

現行の中学年「文字の組み立て方に注意して・・・」が「文字の組み立て方を理解し」に変更、中学では現行「字形を整え、文字の大きさ、配列に気を付けて」が「字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して・・・」に変更。書くことの態度や姿勢の面から知識・理解へと転換させている。このことは、字形の整え方や配列などの原理・原則について知識として理解することを求めている。基礎の文字(教材・手本)から原理や原則を導き出すための思考、話し合い、発表などの学習(言語活動)を通して理解を深めさせたい。ただし、字形の整え方に関する原理や原則は、未だ十分なコンセンサスを獲得していないものもあるが、教科書等で解説されている内容は、簡潔ながら原理・原則を示唆的に示していることが多いので、精読していただきたい。なお、書写は技能を中心としているが、書写に関する知識・理解も書写力を支える大きな力であることから、これらのことをペーパーテストによって随時確認していきたいものである。なお、中学年で「点画の種類を理解する・・・」が加わったことで、今後は点画の種類を知った上で文字を書く必要がある。解説書には基本となる点画8種類明示している。

③ 多様な書字場面への対応

高学年では「用紙全体との関係に注意し」「書く速さを意識して書く」「目的に応じて使用する筆記具を選び・・・」中学校では「目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと」などと新たな文言が加わった。とかく書写の指導では毛筆一辺倒になったり、作品主義に陥ったりしやすいものである。書写の学習の目標は、どのような書字場面においても、適切な筆記具によって適切に書ける能力を習得することにある。したがって、書かれる用紙や形式に、適切な用具を選んで正しく整えて読みやすく速く書くことができるようにしたい。そのためには、さまざまな書字場面を設定して基礎・基本の学習成果を応用させていくことが求められる。

④ 文字文化としての書写

文字を美的に表現することは日本の伝統であり書道文化として継承されている。書写の学習でも、この我が国固有の伝統的の文字文化を感性的に身に付けさせたいものである。中学3年では「身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと」とあり、書き文字や印刷文字などの違いやその意義について学ぶと共に、書道文化を見据えた学習も視野に入れている。小学校国語科書写の段階においても、文字を正しく整えて書くことや文字・書写に関する知識が伝統的の文字文化に直結することを意識させたい。

III 書写の基礎・基本をどのように学ぶのか

1. 姿勢・執筆

<姿勢について>

- ① 低学年で徹底指導することが望ましい。
- ② 唱え歌の活用・・・(例)「足ペタン、お腹と背中にグーっ、左手おいてさあ書こう」
- ③ 書写の授業への関心・意欲が姿勢を正す。
適切な姿勢は授業・学習への関心・意欲のあらわれである。
「姿勢を正しくしなさい」と百回唱えるより、学習内容に関心・意欲を促す指導が姿勢を正す。
- ④ 空書のすすめ
ダイナミックな空書はウォーミングアップと学習の意欲を引き出し、姿勢を正す。
- ⑤ その他
姿勢を持続させるために背筋の強化を図る。姿勢をゆがめないために机上の整理を心がける。
学習意欲を減退させないために、常に課題意識や学習目標を確認する。など

<鉛筆の持ち方について>

鉛筆の持ち方について教科書等で正しい持ち方のフォームは示されているが、指をどのように連携させて鉛筆を動かすのか、それぞれの指の働きはどのようにしたらよいのかなどの原理が示されていない。今後の研究課題である。

<鉛筆の持ち方とその運用の原理>

点画の種類によって指先の運用を定めておくと、どのような筆記具にも応用ができそうである。例えば、点画の進行方向に対して「押す」ことができる指が推進力になる。その反対方向にある指はブレーキになる。
(例) 横画→親指：アクセル(推進力) 人さし指：ハンドル 中指：ブレーキ
縦画→人さし指：推進力 親指：ハンドル 中指：ブレーキ

2. 用具・用材

- ① 用具・用材の知識は、道具を大切に扱い文字をていねいに書くことにつながる。
材料の種類、製造方法の行程(作る人の苦勞を理解することができる)産地の確認・・・総合的学習の時間を活用することができる。
- ② 磨墨の体験を通して墨の良さ、墨の色、用具・用材の大切さを知らせたい。書の実しさを知る機会にもなる。
- ※ 墨が衣服についたり、こぼしたときに「よごれた きたない」と言わないこと。墨は汚いものではなく、永久的に保存できるすばらしい魔法の溶液なのだ。だからこそ大切に注意して扱うのである。

3. 筆使い(筆は「線を引く」道具であって「塗る」道具ではない)

- ① 点画の名称の定着を図る・・・中・高学年でも徹底する。教材文字の点画を全員で確認する。
さて、基本点画(8種類+α)の名称は?
・・・ 横画・縦画・左払い・右払い・そり・曲がり・折れ・点・そして+右上払い

- ② 毛筆の感覚・感触を体で覚える・・・筆圧の強弱の訓練（はね、払い筆圧の加減運動 終筆の次画移行力の考え）
- ③ 点画は始筆からすべて始まる・・・点画の筆使いの新しい学習方法の開発と工夫
- ④ 「一字書き」のすすめ 2マス＝横長四角、4マス＝縦長四角になって字形がゆがみやすい・・・半紙を正方形に折ると基準に近い形になりやすい。
- ⑤ 手取法のすすめ・・・スキミングは手取法から（信頼関係ができてからが望ましい）。

4. 筆順

- ① 筆順の原則指導の徹底・・・筆順力と文法 字源との関係によって興味関心を
- ② 教師の板書の影響力・・・筆順指導は板書によって毎日、毎時間できる。
- ③ 新出漢字の筆順指導・・・原理を押さえ、転移・応用を図る。
- ④ 筆順は字形や行書に影響・・・筆順と字形の関係を押さえる。接し方への影響「口・日」「左・右」の形の違い。点画が連続する行書への多大な影響。など

※ 誤りやすい筆順の文字例（大学生の調査から）

| | |
|-----------|-----------------------|
| 正解率 約 1% | 「凹」「凸」 |
| 正解率 約 10% | 「収」「博」「座」 |
| 正解率 約 30% | 「情」「医」「書」「秀」「ヲ」 |
| 正解率 約 50% | 「臣」「発」「飛」「必」「垂」「進」「無」 |

その他、誤りやすい筆順の漢字
田 病 世 兆 物 初 服

5. 字形・・・一字一筆主義の徹底 終筆の必然性 → 文字生成過程のリズムの獲得

－ 漢字 －

<点画相互>・・・点画相互の関係を考える力

- ① 長短 一画強調の原理（文字生成過程における休止点）・原則・・・字体との関係「土・土」「未・未」
一対強調（最大幅）の原理・・・概形との関連「大」「光」「成」
- ② 方向 点画の種類の確認
点画相互の関連（縦画や左払い）「口・日（視覚重量）」「千・人・大・月」「夏・冬」
- ③ 画間 筆使いの徹底を図らないと困難な場合が多い
・・・硬筆で学習することが効果的
- ④ 接し方 字体との関連 毛筆の場合は点画の筆圧と密接な関連「口・日」「光」
- ⑤ 交わり方 交わる位置・分割・角度への配慮「成」

<部分相互：組み立て方>・・・全体を見通す力

- ① 左右 先に書く方が譲歩 重心のとらえ方 上下の位置関係・・・横書きへの対応
- ② 上下 先に書く方が譲歩
- ③ 内外 文字の中心の感覚 内・外部への配慮

－ 平仮名 －

- ① 曲線の筆使い 終筆の区別（「はね」の扱いに注意）
- ② 字形の中心の確認
- ③ 中・高学年での復習・・・しりとりゲームによって平仮名の再確認
- ④ 使用頻度による取り立て学習・・・使用頻度数の低い平仮名「ね・ぬ・ふ・ゆ」（書きにくい、嫌い）
- ⑤ 字源に即した筆使い・字形の学習・・・早い時期から字源指導を試みる。
1年生配当漢字から て→天 め→女 さ→左 つ→川
2年生配当漢字から を→遠 と→止 た→太 ち→知 も→毛

6. 文字の大きさ

- ① 文字の大きさベストテン・・・文字相互の大きさ調査活動を通じて感覚を養う
<平仮名の大きさ（例）>
おけたにねはほむゆれわ > あえかきさすせそちつととなぬのひふまみめもやよらるるをん > いうくこしへり
・・・では漢字は？ どんな漢字が大きいのかな どんな漢字が小さいのかな

7. 配列・配置（字配り） 書式

- ① 名前・校名を書こう・・・意外に指導されていない氏名と校名。縦書き・横書きへの対応も。
- ② ポスター・標語・手紙・はがきを書こう・・・はがきや手紙の意義と内容・形式は徹底的に。
- ③ 横書きをめぐらして・・・半紙を横にして2字書きから始めよう。ノートの書き方指導を。
- ④ 毛筆でいろいろな種類の紙に書いてみよう・・・画用紙・模造紙・賞状用紙などにも書こう。

8. 速く書くために（文字や手書きの機能を活かし、効率よく書く）

- ・・・小学校から速書き（許容の書き方・行書）の基礎を
- ① いわゆる許容の形の徹底指導・・・漢字指導との連携が不可欠 書き取りの評価との関係は未解決
- ② 行書の徹底指導・・・速書きとしての書体を指導する機会の保証

中学校国語科書写のねらいに「速く書く」がある。「速く書く」＝「行書」という考え方が一般的であるが、その前に楷書のいわゆる許容される書き方の知識、技能を身につけたい。また、行書指導にあたっては、楷書とは別の書体学習ということではなく、あくまでも速書きとして学習することを意識した指導でありたい。・・・「新常用漢字表」の許容と手書きの意義を踏まえる。

IV 授業方法の工夫（エピソード記憶、長期記憶をめざして）

- ① 児童・生徒主体の授業の工夫・・・発問による基準（原理・原則）の発見、課題解決へのヒント
- ② 基準を持つ文字の発見・・・基準文字（手本）以外の文字を発見し、応用して書く（まとめ書きとして）
- ③ 書写の日常化を図るために（手本無し論のすすめ）・・・手本をみないで書く学習方法の定着
- ④ 用具・用材の多様化・・・書写の日常化を図るために半紙、ノート以外の用紙に様々な用具を用いる。
- ⑤ 自分の言葉、好きな言葉を書いてみよう
- ⑥ 極小、極大の文字を書いてみよう

V 目標、児童の実態に即した授業形態の工夫（個を生かす授業の工夫）

※ 「言語活動」によって文字意識、文字感覚、文字への興味関心などを高めるとともに、思考力・判断力表現力を高める。

- ① グループ学習の導入・・・共通の課題を解決する場合、基準の発見や基準文字発見の場合など
- ② 児童による書写研究会・・・筆使い、字形の秘密を探る研究 書式の種類やその書き方を探る研究
- ③ 発表会・・・グループ、研究会などでわかったこと、調べたことを発表
- ④ ゲームの活用・・・(例) しんじょうの文字を探し、字形を基準通りにたくさん書けたチームが勝ち

VI 評価活動の工夫（絶対評価の在り方）<書写の評価規準、評価基準>

- ① 自己評価 相互（児童同士による）評価 全体評価・・・相互評価の効果が高い
- ② 評価カードの活用・・・カード回収後の教師による評価が不可欠
- ③ 知識・理解の評価・・・ペーパーテストによる知識の理解度の確認（点画名・字形の原理と原則など）
- ④ 文字バンクの提唱・・・1年間の試し書き、まとめ、発展課題の作品を保存→次学年へ→卒業時に返却

VII 書写指導の今後の課題

- ① 国語の「書くこと」、文字指導、また他教科、総合的な学習の時間などとの関連をどのように図るか。
- ② 文字環境の変化への対応・・・印刷文字、デジタル文字、書き文字との違いをどのように理解するか。
- ③ 毛筆と硬筆との関連・・・学習目標、内容、効果を考慮した用具の選択。何がなんでも毛筆で学習することの見直し。「書写力」とは、どのような筆記具であれ、文字を正しく整えて書き、文・文章を読みやすく効率よく書く能力であることを常に意識して指導することが重要と思われる。
- ④ 小・中学校国語科書写から高等学校芸術科書道へのスムーズな移行をどのように図るか。

VIII 書写と書道

- ① 書写と書道の乖離の是正・・・生涯学習の視点から書写、書道を考える
- ② 書写と書道の共通点の確認・・・
言葉を書く 毛筆の使用 練習過程の思考力・判断力・表現力の育成
作品完成による達成感・成就感の喜び 作品による自己実現 日常生活・社会との結びつきなど

| | |
|---|---|
| － 「文字を習得・実現する」 から 「文字を審美の対象として表現・鑑賞する」 へのプロセス － | |
| <文字の習得：受動的> 「用」の側面 | 文字との出会い → 文字の習得（読字・書写【字体の習得】・運用） → 文字の書き方の習得（筆順、筆使い、字形、配置・配列、速書） → 社会生活への活用 |
| <文字の表現：能動的> 「美」の側面 | 書との出会い ⇒ 書の表現方法の習得 ⇒ 自己表現・鑑賞 ⇒ 社会生活への活用 |
| <p>※ 文字の習得・表現は生涯を通じて行われる学習であり活動である。学校教育においては、文字の書き方の習得は小・中学校国語科書写で行い、文字の表現は高等学校芸術科書道で行なわれる。このように、書写と書道は国語科と芸術科とに分かれてはいるが、文字を用と美のウェートのかけ方に違いがあるだけで、筆記具を用いて文字、文、文章を書く点においてはまったく変わりがない。文字の書き方の学習によって自己の考え・意見を読みやすく的確に伝達し記録する能力を育み、その上で生涯を通じてさまざまな表現の喜びを味わうことができるようにしたい。そのためには両者は密接な関係を保っていききたいものである。その意味で、義務教育では、発達段階に応じて、また児童・生徒の実態に応じて、書の存在、自己表現としての書のあり方などを伝える機会を与えたい。そうすることで文字の用と美の両面を兼ねた生涯学習の種をまくことになる。</p> | |